

大分県におけるチャの整枝技術

佐知志保・広瀬真一・稲垣智之・玉田重吉 (大分県農業技術センター)

Shiho SACHI, Shin-ichi HIROSE, Tomoyuki INAGAKI and Shigeyoshi TAMADA :

Skiffing Techniques (Plucking Frequency, Skiffing Degree and Skiffing Time) of Tea Plants in Oita Prefecture

大分県では一般に三番茶の摘採が行われ、また、一番茶収量に影響を与えると考えられる整枝時期についても幅広い時期に行われている。そこで、標高150mと400mの地域で、三番茶の摘採の有無と整枝時期、整枝強度が翌年の収量、品質、芽の形態に与える影響を一番茶の増収に主眼をおいてみるにより地域に適した整枝技術について検討した。

1. 試験方法

試験は標高150mの場内、400mの耶馬溪町鼻操茶園で行った。供試品種はやぶきた (場内15年生、現地16年生) で肥培管理は当场基準とした。試験規模は、1区9m²の3区制とし、年間摘採回数、整枝強度について以下の3通りの処理を行った。

処理1: 年3回摘採し、最終摘採面より3cmあげて整枝

処理2: 年2回摘採し、最終摘採面より3cmあげて整枝

処理3: 年2回摘採し、最終摘採面より5cmあげて整枝

但し、処理2は場内のみで行った。整枝時期は上記の処理に対してそれぞれ次の月日を設けた。秋整枝として10月15日、春整枝として3月5、10、15、25日。但し、3月10日は場内のみで行った。摘採は手ばさみで収量調査を行い、摘採時に枠摘み (20cm×20cm) により茶芽の形態を調査した。化学成分分析は、蒸葉乾燥した試料を用いてHPLC法により、また、製茶品質の比較は小型製茶機で煎茶を製造して官能審査により行った。

2. 結果及び考察

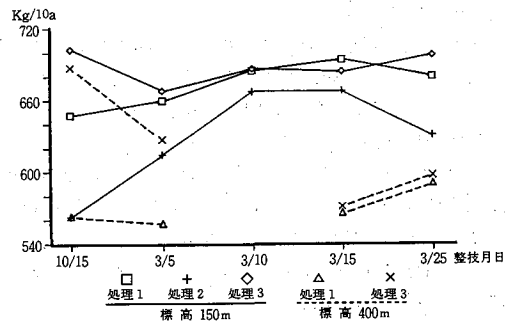
1) 茶芽の形態に与える影響

標高150mの地域では、年間摘採回数、整枝強度が茶芽に与える影響は小さく、処理によって顕著な差異が認められなかった。整枝時期では秋整枝で芽数が増える傾向が、いずれの処理でも認められた。標高400mの地域では、処理1、3を比較すると顕著な差異が認められ、処理1では芽数が多く百芽重が軽い傾向、処理3では芽数が少なく、百芽重が重い傾向があった。このことから、標高の高い地域ほど年間の摘採回数や整枝強度の影響を受けやすいと考えられた。

2) 一番茶収量に与える影響

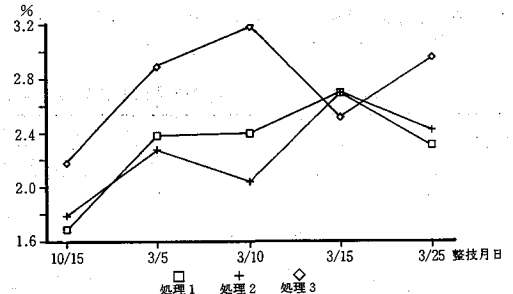
標高150mの地域では (第1図) 処理2で最も収量が低く、特に10月15日、3月5日整枝で低かった。処理1は10月15日、3月5日整枝で減収したものの、3月10日以降では安定した。処理3は、いずれの整枝日でも安定した収量を得た。処理間の差は3月10日、3月15日で小さく、整枝時期を3月中旬とすれば、この地域では摘採回数や整枝強度の影響を受けにくいと思われた。また、春整枝の中で3月5日で最も低収となることについては、

この時期ではまだ0℃を下回る低温の出現により整枝後の摘採面の茶芽が低温害を受けて、芽揃いが悪くなるためと考えられた。標高400mの地域では処理3の10月15日、3月5日で収量が高かったが、処理1及び処理3の3月15日、25日では低収であり、この地域では、二番茶までの摘採として秋整枝を行うことが一番茶増収に有効であり、三番茶を摘採した場合は葉層が薄くなるので3月中旬以降の春整枝とすることが望ましいと考えられた。



第1図 摘採回数、整枝強度の処理及び整枝月日別の一番茶収量

3) 化学成分への影響
標高150mの地域で調査した結果 (第2図)、全窒素、カフェイン含量は3とその他の処理及び整枝時期にかかわらず比較的安定していたが、アミノ酸、タンニン含量には変動がみられ、特にアミノ酸含量には、処理3で高く、また秋整枝に比べて春整枝の方が高くなる傾向があり、冬期の葉層が厚いほど一番茶のアミノ酸含量が高まるものと考えられた。



第2図 摘採回数、整枝強度の処理及び整枝月日別のアミノ酸含量 (標高150mの地域、一番茶)

4) 製茶品質

標高150mの地域で、いずれの処理でも収量が安定していた3月15日整枝で処理間の製茶品質を比較した。外觀では処理1がやや優れ、処理3がやや劣ったが、内質では処理3がやや優れ処理1がやや劣ったため、審査評価では1、2、3の処理で差異は認められなかった。